

『サロベツのガンカモ類』

令和4年12月18日（日）14：30-15：30（会場+オンライン）

挨拶 千葉幸悦（サロベツ・エコ・ネットワーク）

講演

ペンケ沼におけるガンカモ類と保全上の課題

長谷部 真 （サロベツ・エコ・ネットワーク）

質問

会場：定住支援センターふらっときた

北海道天塩郡豊富町豊富東1条6丁目

主催：NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

協力：日本野鳥の会道北支部

ほっくー基金助成事業

講演要旨

サロベツのガンカモ類とペンケ沼活動報告

長谷部真（NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク）

北海道北部にあるサロベツ湿原周辺は国立公園、ラムサール条約登録湿地、フライウェイパートナーシップ(ガンカモ類)に登録されています。サロベツ湿原周辺には大きく分けて5つ(大沼:稚内市、兜沼:豊富町、泥炭採掘跡地:豊富町、ペンケ沼:豊富町・幌延町、振老沼:天塩町)のガンカモ類の主要な渡りの中継地があります。春と秋にはマガン、ヒシクイ、コハクチョウ、オオハクチョウが利用し、近年はカリガネ、ハクガン、シジュウカラガンなどが確認されるようになりました。多いときでマガンが13,000羽、オオヒシクイが5,000羽確認され、全体的な傾向として春にマガンが多く、秋にオオヒシクイが多くなっています。兜沼では春のマガンと秋のオオヒシクイが増加傾向、ペンケ沼では秋のオオヒシクイが増加傾向、春のマガンが減少傾向にあります。

元々道北最大のガンカモ類の中継地であるペンケ沼に流入する大きな河川はありませんでしたが、下エベコロベツ川(1926年)と福永川(1968年)が人工的に接続された結果、流入域が16倍になりました。その後沼に土砂が堆積するようになった結果、沼の面積が半分以下に減少し2つに分断されました。このままでは将来ペンケ沼は土砂により埋没し、重要なガンカモ類の中継地が失われる恐れがあります。このため私たちはバードライフインターナショナル東京(PCPD、2020年、2021年)、ほつくー基金(2022年)、e水プロジェクト(2022年・子供活動)から支援を受け、ペンケ沼の保全に向けた様々な活動を行いました。

ペンケ沼の水質を調べるために4月・7月・10月の3回採水を行い、水質分析を行いました。その結果、COD(化学的酸素要求量)、SS(浮遊物質)、全窒素、全りんなどの環境基準を達成できていない項目が多くあり、富栄養化していることがわかりました。

下エベコロベツ川からペンケ沼へ流入するゴミを把握するため、4月にカヌーでゴミ調査を実施しました。その結果流入するゴミは沼の北東岸に集中していることがわかりました。9月には普及啓発のために地域の子供達とゴミ拾いとガンカモの観察を行いました。

ペンケ沼の埋没状況を調べるために、湖面積・水深・水草調査を実施しました。ドローン飛行調査によりペンケ沼の面積(南側)は2021年には1.0km²となり、1923年(2.6km²)の38%に減少し、下エベコロベツ川河口部の先端が南岸まで120mの距離に達していました。このままでは近い将来にペンケ沼は3つに分断される恐れがあります。水深は下エベコロベツ川河口周辺では2021年に平均16cmになりました。沼は低水深化により湿原化が進んでおり、2022年7月にはペンケ沼(南側)の38%が抽水植物に覆われていました。

ペンケ沼埋没の恐れは過去に上サロベツ自然再生協議会の議題に挙げられましたが、具体的な保全対策が実施されていません。この地域は過去の河川の氾濫を克服し、開拓による湿原の牧草地化によって発展してきた歴史があります。酪農は基幹産業ですが、今後はガンカモ類との共存に向けて下エベコロベツ川の流路変更・沈砂池の設置などのペンケ沼保全に向けた対策を講ずることが求められます。

サロベツは積雪が多い地域にあるため、春の雪融けにより河川が氾濫し牧草地が冠水しますが、農地改良事業により、牧草地には排水路が整備され水はげが改善されてきました。一方で春の牧草地の冠水は牧草地に上流からの栄養分の供給をもたらすだけでなく、ガンカモ類の渡りの中継地としての役割を果たしていますので、今後はガンカモ類に配慮されることも望まれます。